

「ヨーゼフ・ボイス：彫刻理論と錬金術—芸術、自然、精神世界を貫く 3つの造形原理」

まずは今日ご招待いただいた守谷さんはじめ、FIUの方々に御礼申し上げたいと思います。先ほど守谷さんがおっしゃったとおり、今年はボイス没後 20年に当たるわけですが、20年経ってもこれほど多くの方々がボイスに興味を持っていらっしゃるということをとて嬉ばしいと思っています。

通訳を引き受けてくださった大貫さん、ありがとうございます。他人のことを通訳するというのは楽しいことではないと知っていますが、残念ながら日本語はできませんので、通訳をお願いしないといけません。

また、日本の FIU の最初の創設者の方々にここでお目にかかれることができ、とてもうれしく思っております。特に針生先生とは 12 年前に初めて東京でお会いして以来、ずっと今でも親交を持たせていただいております。

今日は、ボイスの思想についてのイントロダクションを行いたいと思いますが、ボイスの思想、特に彼の場合には、理論と実践というものが常に密接に結びついております。このことをボイス自身がパラレルプロセスというふうに、それぞれが並行して起きるプロセスと申しておりますけど、彼はやったことについて常にそれについて語っておりますし、また逆でもあります。また自分のことだけに限定されるだけではなくて、さらに社会に影響のある形でのさまざまなパラレルプロセスというものを実行してきたわけです。

彼の、ボイスの中心的な考えは、彫刻理論であるといつてよろしいでしょう。この彫刻理論の考え方を、ボイスはさまざまなディアグラムにも記しましたし、またさまざまな講演でもしゃべってきましたし、また講演で黒板に書いたさまざまな図ですね、そうしたものでも示してまいりました。

今日、特にお話を申し上げたいのは、この彫刻理論に関するディアグラム、ダイヤグラムの発生に関してでございます。で、この考え方を、その後ボイスは何度も何度も繰り返しておりますので、この発生について今日はお話したいと思っております。

この彫刻に関する理論というのは、ボイスの作品のどれにも見ることはできますけれども、今日はそのうちのいくつかしか皆さんにお見せすることしかできませんけれども、その特徴的なところを捉えて、いくつかをご紹介しますと思います。

ボイスはさまざまなことをしてまいりました。ある時には、絵を描き、ある時には具体的な

彫刻というものを作り、また空間を造形し、またアクションをし、またインスタレーションをし、というふうにさまざまな、多様な活動をしてまいりましたけれども、これらの多様な活動の背後には常に、彫刻の理論というものが存在していましたし、そこにはさきほど申し上げましたパラレルプロセス、その 2 つのものが同時に起きているという、その考え方が常に伴っておりました。

私自身、ボイスの作品かなりたくさん知っておりますが、その中から今日いくつか皆さんにお見せするもの、数は少ないですけども、どこかで代表的な作品というものを皆さんにお見せすることができると思っております。

まず最初にいくつかのスライドをお見せしながら、ボイスの作品を紹介し、その後で、講演の終わりました後で、皆さんとディスカッションをすることができればと思っております。

最初にお見せしているのは、アクションですけども、「掃く」、箒を使って掃くというタイトルです。これは、5月の1日、すなわちメーデーの日に行ったものですけども、このアクションが意図しているのは、当時のいわゆる、68年世代、学生運動世代がマルクス主義の考えにのっかってデモをやったわけですが、それに対するアンチテーゼとして行ったアクションです。

この上の所に、カール・マルクス広場と書いてありますが、

このアクションの背後にあるのは、当時の彼が見ていたマルクス主義に対して批判的な距離を取りながら、その中からそれに対抗するものとして、「社会彫刻」という考え方を生み出していった、それをよく示すものです。

マルクス主義というのは、ボイスが考えるには個人という考え方から、大衆へという思考の展開をしたわけですけども、結局のところは党の独裁というところに行き着いてしまった。そのことにボイスは批判を向けているわけです。このアクションで見ることができるのは、ボイスはデュッセルドルフのブラックの学生といっしょにカール・マルクス広場を掃いているわけですけども、掃いているという行為は、当時のマルクス主義がしでかしたさまざまなよくないこと、マイナスの点、それを一緒に掃いてしまおうという行為なわけです。

これに対して、マルクス主義に対して、ボイスは彼なりの理念というものを展開するわけです。それが、彼の言うところの「社会彫刻」という考えに発展していくわけですが、まだ社会彫刻というのはいったい何なのか、それはまだ実際形は見えていないわけですけども、その最初の発生はここにあります。

この社会彫刻という考え方に発展する、彫刻の考え方、これについて後ほどまた詳しくみていきたいと思います。

2 番目にお見せしているのは、アクションですけれども、これは東京でナムジュン・パイクと一緒にやったアクションの続きです。これはコヨーテを使ったアクションですけれども、ニューヨークで行ったものですが、このアクションでボイスが示したかったのは、野生の動物、コヨーテのような野獣というものを、撲滅させてしまうのではなくて、その荒々しい野生の動物を、コヨーテのような動物を音楽によって、その人間と親しくなれるような、てなづけることができるということを示そうとした、アクションです。

このアクションのために、ニューヨークでボイスは3日間コヨーテと一緒に閉じこもって、一緒に生活したわけですがけれども、こちらの右にあるのは、牧人ですね、その牧人というものをフェルトで作っているわけですがけれども、格子を作ってその中で3日間コヨーテと一緒に過ごしました。

このコヨーテとの一緒にの生活でボイスが示そうとしたのは、敵というのは打ち負かすのではなくて、その敵を友のように変えていくことができるのだという、それを示そうとしたのです。

ここの写真にも見られますけれども、その牧人に、フェルトを身にまとったボイスですね、そのフェルトをコヨーテが裂こうとしてますけれども、このように荒々しくなると、ボイスはトライアングルを出しまして、その鐘の音を鳴らす、そうするとコヨーテはそういう荒々しい行為をやめるといふ行動を取ったそうです。

ボイスはこのアクションで、東京でやったのと同様に、ニューヨークにおいてもやはり政治的な意味を持ったアクションというものを考えていたと思います。

これからいくつかお見せしますのは、ヨーロッパでも非常に有名になりました、油脂、脂を使ったコーナーを作るというアクションです。

なぜこのような脂を使った、油脂を使ったコーナーを作るという行為をボイスがしたのか、これは後ほどご説明申し上げます。

ここでご覧いただいているのは、まだ部屋のコーナーを使った脂のアクションじゃなくって、まだ2枚の板でコーナーを作ってその間にマーガリンを塗りこんでいるところですね

れども、この 2 枚の板で囲んだ空間というものは、後ほど部屋の空間へと発展していくものです。

ここでご覧いただいている脂の、油脂のコーナーですけれども、これは非常に特徴的なものです。

ここで見ていただくと分かると思いますが、これは部屋のコーナーでして、2つの壁が直角に向き合っているわけですね。この直角のところをこのように、前に線を引きますとちょうど立体形が作れるわけです。

こちらの左の方にはドアがありまして、こちらの方には窓がある。

こうしたドアや窓というもの、常に直角の形をしているわけです。

ボイスはこの角のところに、脂を塗りこんでいくわけですが、マーガリンを塗りこんでいくわけですが、

ここでなぜ、ここに脂を塗りこむのかということの答えについて後でお話しますが、まずこの段階で考えて、覚えておいていただきたいのは、直角のところに、直角に交差する空間というものとして部屋というものが私たちの前にあるわけです。そこにボイスはマーガリンのような油脂を、脂、そういうものを持ってきて、それをまずこねる、で、こねた脂をあそこの角にああいうふうには押し付けまして、その表面を平らにするわけですが、ここで私たちが目にしているのは、まず部屋がある、部屋があるところにボイスはアクションを行う。で、その脂というものは、ひとつのボイスが使うものであるわけですが、その直角のところにボイスがアクションによってあるひとつの物体というものを、物質というものはめ込むという、その動きがあるのだという、それだけをとりあえず今のところは覚えておいてください。

今、私たちがさまざまなギャラリーや博物館でボイスが行った後のこういう脂のコーナー、油脂のコーナーというのを見るわけですが、それが先ほど申しましたように、一連のアクションがあった後の一番最後の結果であるという、そうした見方をしなければならない、そうしたことを覚えておいていただきたいと思います。

ただここでいったんアクションは終わるわけですが、ただこのアクションがここで終わるわけじゃない、彼が残したものはさらに変化していくわけです。この写真で見て分かるように、脂の角の終わった壁のところに、脂の染みが、染み出していますけれども、

その意味でボイスの作品というものは、その作品がさらに継続して作用をもたらす、さらに動きがあるということでもあります。で、グッゲンハイムでボイスの展覧会がありました時に、そこでそのカタログに彼自身が書いていることですが、彼の作品というのは決して終わることはない、そうではなくて、残したものは形を変えていくか、崩壊していくか、形が崩れていくか、いずれにしても終わることのないプロセスであるということを彼自身が書いています。

私、かつて私の学生とそれからボイスと一緒に議論したことがありまして、それは「芸術とは何か」"What is Art"という本に記録されておりますけれども、そのボイスとの会話の中で私たちはいったいいわゆる「社会彫刻」というのはいったいつになったら完成するんだという質問をしたんですけれども、それに対してボイスは、まあ将来いつまで、というその時間は限りなく長い、多分 500 年ぐらいかかるんじゃないかという答えをしていました。

考えてみてください。この脂のコーナーですね、この 500 年後にどのようになっているのか、ちょっと想像してみてください。

多分時間が経つとともに、500 年後までの間に、この脂ですね、油脂はだんだん壁を伝わって、壁全体に行きわたり、冷たい壁に脂が浸透していくということになると思います。まさにここにこそボイスが考えていた彼の作品の社会的な意味というものがあられるわけです。これについてはこの講演の中でまた詳しく述べてまいります。

このようなコーナー、油脂、脂を使ったコーナーをたくさん、いろんなバリエーションでボイスは作っていますけれども、今ご覧いただいているのは、ガーゼを間に挟みこんだものです。これをボイスはフィルターというふうに呼んでいます。

このガーゼを使ったフィルターのコーナーですね、これはそれなりに美的な印象を受けるとは思いますけれども、もしかしたらここに禅の感覚と同じような美的感覚を見つけることができるのかもしれない。

このフィルターのコーナーをどう考えるのかということについては、ちょうど禅の瞑想と同じぐらい、時間がかかることなのかなと思います。

このフィルターとしてのガーゼがどういう役割を果たしているかという、非常に冷たい角ばったこのコーナーとそれから脂との間にガーゼがあるという意味で、その脂を保護する役割をフィルターに与えているというふうに言えるでしょう。

このフィルターとしてガーゼのほかにも、ボイスはときどきフェルトを使っています。このようなフェルトを使ったのは、フェルトのコーナーという一連の名前で呼ばれています。またボイスが家族と一緒に新しい部屋に転居したときに、娘の部屋をこのように、端っこに砂糖のコーナーというものを作りました。その砂糖のコーナーの上にこういう色のあるランプをつけています。

残念ながらこの砂糖のコーナーというものは現在存在していません。多分、全部お砂糖をありが食べちゃったか、あるいはボイスの奥さんが全部片付けちゃったか、どっちかなんじやないかなと思います。

私自身、ボイスの奥様にまだこの砂糖コーナーありますかと聞いたならば、あれはもうないんですよと言っていました。なぜかというとなれはなくなっちゃっても、砂糖コーナーなんて誰でも作れるじゃありませんかと答えていました。

脂というものは、すべての種に含まれているものです。それと同様、砂糖というのは、すべての果実に含まれているものです。その両方とも内にエネルギーを秘めたものであるということが出来ます。

今、ご覧になっているのは、バーゼルの個人の家で作ったものですが、この端っこです、直角の端っこのコーナーのところに棒を入れて、棒でさらに直角性を強調しています。しかし、その棒自体は丸い形を取っていて、で今までの油脂や脂や砂糖の代わりにここで使われているのは粘土です。ここで粘土を使っているというのは、結晶性の物質ではなくて、結晶とはまったく別の物質性を持っている粘土というものを選んでいて、それが直角というものと非常に好対照を成していると言えます。

今ご覧いただいたのは、合計で 5 つのコーナーのアクションですが、このコーナーというものは、ボイスの作品にとって非常にシンボリックな意味を持っているので、この 5 つをお見せしました。

ここでご覧いただいているのは、さまざまなマテリアルを重ねているんですが、この奥の右側、ここから奥の部分がフェルトを重ねていったものです。手前の白く見える部分が鉄です。その下の部分が銅で、銅の板を重ねていったものですが、このようにさまざまなマテリアルを重ねるということの意味なんですけれども、一種のバッテリーの要素というものをここでシンボライズしているわけなんですけれども、また同時に銅と鉄との組み合わせというものが、ヨーロッパの神話の中で男と女というものをシンボライズしていることをここで申し上げておきたいと思います。

ここでもまた直角とか、あるいはまた立方形をした形を使っていますけど、しかしここで先ほど申し上げましたように、鉄と銅という 2 つの金属を使うことによって、その発生するエネルギーというものをシンボライズしていると同時に、その奥の方に使っているフェルトというものは、その熱を遮断し、また保存するという、そうした役割を示しているわけです。

この作品は、カッセルで保存されている作品ですけれども、「そり」という作品です。

この小型バスからたくさんのそりが出てきていますけれども、ちょうどそり滑りのように小さな小型バスから、たくさんのそりが出てくる。

このそりの上には、さまざまな物質が載せられていまして、たとえばこれは懐中電灯が載っているものですね。

これはデュッセルドルフの芸術アカデミーのところで撮られた写真ですけれども、この写真、非常にバスから出てきたそりが光を前に向かって発射しているという、そういう様子がよく分かる写真だと思います。

このそりですけれども、よく見ていただきますと人間が生きることにとって非常に重要な要素を積み込んでいるわけです。まず光です。それから脂ですね、油脂、それから熱を保温するものとしてのフェルトが載っているわけですけれども、このような光、それから油脂というものは、人間にエネルギーを与えるものです。で、このような組み合わせですね、保温、それから生きていくためのエネルギーを与える油脂、脂、こういうふうな組み合わせというものは、アルプスの地域では、よく雪崩で遭難した人を助けに行くためにそりの上に載せていくという、そういう実際の生活でも使われているものでもあるわけです。

私は今説明しながら、ボイスの彫刻の理論について説明しようとしているんですが、どうしても理論のことを話しますと、とても非常に難しい言葉、難しい概念が入ってきてしまうんですけれども、それはどうしても理論を背景にしながら作品を説明していくとき仕方がないので、申し訳ないが許してください。

もしもこうしたボイスが作った作品ですね、これをミュージアムに保存する場合には、おそらくこの作品の前に、どうぞ作品を触ってくださいという、そういう但し書きをするべきなんじゃないかなと、私は思います。

ただ残念ながら、ほとんどの美術館では触らないでくださいという但し書きが書いてあり

ますね。

実際にフェルトの上に手を置いてみますと、いかにフェルトというものが暖かさを蓄え、そして保存するものなのかということ、実際に手で感じるすることができます。

また、この油脂、脂の塊を手にとってみますと、手に塗ってみますと、脂というものがいかにその、化粧の上でうんぬんという以上に、清潔なものであるのか、人間の衛生のためにいかに役に立つのかということ、それが実際に肌で分かると思います。

また懐中電灯ですけれども、これはいつも点灯されているべきものであって、夜、美術館が閉まってもずうっと点灯されているべきものです。というのは、この懐中電灯は言ってみれば、光をシンボライズする徴であり、美術館の中に収集されたさまざまな美術品というものが、いかに硬直してしまっているのか、ということ、それを逆に照らし出すような光として働くべきものなのです。

私が今しゃべったことは、とても抽象的なことだと思いますけれども、皆さんカッセルにいらっしゃって実際にこの小型バスから出てくるそりですね、これを実際ご覧になれば、そして、その懐中電灯が照らされている光景をご覧になれば、いかにこの作品がただ抽象的なものだけではなくて、非常に美的なものであるということを実際にお感じになれるんじゃないかなと思います。

ボイスの作品は、ご存じのようにカッセルで行われますドクメンタで何度か示されておりますけれども、72年に彼がそこで行ったアクションというもの、作品というものは、直接民主主義のための作品というふうに名付けられまして、100日間にわたって彼はそこで、この直接民主主義のためのアクションというものをやり続けました。

このドクメンタで、ポストカードにもなっていますが、このように私が今手に持っているように、メスシリンダーの中に赤いバラを一輪挿しまして、そこにボイスは、バラなしでは私たちは何もしないという言葉を書きました。

1977年には Free International University の企画で、同じく 100 日間のアクションを行いました。そのときには東京からもさまざまなイニシアティブと支持を受けました。

この 77 年に彼が作ったインスタレーションは「仕事場の蜂蜜ポンプ」という名前です、これは非常に大きなもので、カッセルの展示会場になった美術館の地下からずっと上に上がって行って、階段ホールが一番上のガラスの丸天井にまで到達するような大きなもので

した。

これはオープニングの 1 日前に公開された現場を、当時の新聞に載せたものなのですからけれども、これ一番下のベースメント、地下の部分です。下の白い塊は脂で、そこにモーターがくっついていることが窺われますが、まだモーター自身は動いていません。

上に左側にボイスがいますが、その隣にいるのは私自身です。ボイスが私に個人的に言ったのは、どういうふうに蜂蜜ポンプは動くのか？ どういうふうにできているのかということの説明してくれました。

これ、もう一度。ベースメントを上から撮ったところですが、もう下のローラー、モーターが回ってしばらく経っていますので、この間にいかに脂肪の塊が形を変えているのかご覧になれると思います。左上に見られるのがポンプですが、あそこのポンプを通して蜂蜜が上に送られ、こちらの右側の白い管を通ってもう一度、蜂蜜が戻ってくるという、装置です。

ここは、先ほどのベースメントの上にある部屋なんですけれども、ここでは 50 人が席に座り、また 100 人ほどが立ち席でということですが、100 日間にわたって朝から晩まで休みなしに議論をしました。その議論のテーマというものが、原子力爆弾について、あるいは原子力発電について、という私たちの人間社会にとって非常に重要なテーマですが、それについてさまざまな地域の F I U からの参加者がこちらの方に参加しまして、休みなく朝から晩まで議論しました。

このインスタレーション全体が「仕事場における蜂蜜ポンプ」というのですが、なぜ仕事場かという 100 日間ここで議論をし続けるということが労働である、仕事であるというふうにボイスが捉えていたからです。

ここの議論に参加した方、たくさんいるんですけれども、その中で一人、シェリー・ザックスという方がいらっしゃいます。で、この人はボイスのドクメンタのアクションをずっと手伝ってきた人ですが、この人は今、オックスフォード・ブルックス大学におりまして、その大学でマスターコースを作りました。このマスターコースは **Social Sculpture**、社会彫刻のためのマスター、そういうコースを作った方です。

このシェリー・ザックスのマスターコース、2 年ないし 3 年勉強することができますけれども、そこで芸術と社会活動という、その両方を学ぶ、その 2 つを結び付けるということをお勉強するわけです。

また、日本のF I Uの行った展覧会、これは日本全国を回りましたけれども、そこで示されたのは、パレスチナとイスラエルの抗争の中でパレスチナの人々が無残にも殺されていく、そうした姿の現実、それを示すという展覧会を行ったりしました。

ボイスが、彼の芸術作品というもので考えていたのは、芸術作品というものは私たちが目の前に見えるものだけを見ているのではなくて、それを超えて、いかに社会的な問題へと思考をつなげていくのか、まさに社会的な思考をするということが造形であり、彫刻であるという、そのことを考えるためのきっかけとして、芸術作品というものを考えていたと言えます。

思考というものは、一方ではカオス的になってしまう、混乱を来たしてしまうこともあり得るし、またその混乱を避けようとするれば、非常に硬直してしまう、非常にイデオロギーになってしまう、また非常に党派性を持ってしまうということもあるわけです。で、ボイスが考えていたのは、まさにその2つの極の間で、カオス的に混乱の中に埋没するのでもなく、また硬直にいたるのではなく、その2つの極の間を行き来すること、またその両極を認識することがまさにボイスにとって、思考がすべきこととしてみなしていました。

このボイスの作った蜂蜜ポンプという作品について、ある人がこれは芸術ではないんじゃないかと、むしろアクションじゃないのかといった人がいたんですけども、それに対してボイスはどちらでも構わない、というふうに言ったそうです。で、もしもこれをインスタレーションとして考えるのであれば、もう少しプロポーションを直さなければならないというふうに答えたそうです。

このインスタレーション、ちょっと一つ前の写真になるんですけども、蜂蜜というものがまず動きの中に載せられる、そしてそれはまたエネルギーを持ったものであるわけですけども、先ほどの集会場ですね、議論が交わされている部屋にあったぐるぐると巻いた線がありましたけれども、あの中を蜂蜜は通りまして、これがさらに上のところの階ですけども、その下のところから蜂蜜がずっと上がってきて、後ろに見えるのが階段のホールが一番上にあるガラスの丸天井なんですけれども、そこから次の鉄(銅)のパイプがありまして、それが途中で下に曲がって下りて、あそこで終わっています。で、この終わっているということは、すなわち一番最初に始まるカオス、混乱、まったく秩序のない状態から、一番最後の終わりがある、終点、その間のところでまさに動きが起きている。そのカオスから動きを通して、エネルギーを持ったものが一番最後に終わるという、その過程がここでは示されているわけです。

そしてこの閉じたところから、また戻って、またこの下にパイプが伸びていますけれど

も、これを蜂蜜が通ってまた元のところに戻るといところでこの循環構造が閉じるということになります。

ちょうど人間の体の循環が、上から下へ、下から上へというふうに、その血が巡っているのですけれども、その間で人間はどこかで息をする、その息をするということが、先ほどの集会で人々が出たり入ったりするという、そうした出入りの動きですね、それによって人間がちょうどどこかで息をして、また新しい動きを吸い込んでいって、またその動きが空間における人々の出入りということを示されているわけです。

一見、この蜂蜜ポンプというのを見ると、よく分からない、何しているのかよく分からないところがあると思いますけれど、このような形で、とりあえず目に見えるものと示し、そして人々がこれを見たときによく分からない、というふうな戸惑いを感じる、でそのことによってまさに、ひとつの社会的な人間の動きというものを作り出しているわけなんです。

ここにご覧いただいているのは、ボイスが講演するときの典型的なシーンですけれども、この後ろに見えますように、彼は講演するときいつも黒板に図を書きました。彼は、思考、考えたことをこのように図に表すわけですが、この図に表したことをまた彼は、言葉にしていく、アクションにしていくということで、ここでもひとつの平行・プロセス、平行した2つのものがいっしょに動いているんだという、その平行プロセスが見てとれます。

ボイスが東京に来たときに、彼はやはり通訳を介してしゃべらなければならなかったんですけれども、彼はいつでもしゃべるときにエネルギーを持って語るわけですが、それが翻訳されてしまうとどうしても、お経みたいなもの、ボイスがしゃべったことが独立してしまう、そうした危険性があるんですが、私が今日こうしてしゃべっているときにも、やはり同じ危険がありまして、どうしても翻訳されてしまうと、本来平行プロセスであるべきものが、ひとつだけのしゃべったことだけが独立してしまうという危険性があると思っております。

ここで、ボイスを理解する、逆にボイスとともにボイスを理解するというために、1つの実験を試みたいと思うんですけれども、いかに私たちが見るということをしているか、私たちが見ているとは何なのか、それを自然との関係で説明したいと思います。

ここでご覧いただいているのは、二重の平行プロセスというふうにいえます。下に見えますのが、先ほどドクメンタのときに見ました蜂蜜ポンプです。これが今度は絵になっていますけれども、この絵の蜂蜜ポンプの上に植物が重なっています。ここでは蜂蜜ポンプから作られるエネルギーというもの、それがリズムを持ったプロセスを持ちながらしだいに上

の植物にいたるという過程で、抽象化されたひとつの形をとる、その一連の動きを示しているわけです。また植物そのものをもう一回見てみますと、根っこから、葉、そして花というように、この植物自体もひとつのプロセスになっているわけですし、その意味で二重のレベルプロセスを示しているというようにいえます。

ここでボイスが示しているのは、自然というものの理論化というのが、いかに危険性を持っているのか、それを示しているわけです。すでに申し上げましたけれども、72年のカッセルのドクメンタで、「バラの花がなければ何もしない」と言ったわけですが、ここでは植物というものが、ボイスの自然の理論化、一般の自然科学でなされている理論化というものの危険性を示すものとして、ここで示されています。

この植物を見ていただきますと、ここに3つの部分があることが分かると思います。まずは根っこの部分です。それが葉になっていって、葉自体もまた形を変えていっているのが分かります。それからひとつ進みますと、今度は平行な花が伸びていくわけですが、ここでは3つの段階によって、3つの彫刻的な要素というものが、ここで3つ示されているといえます。

これを大きくしたものですけれども、

これは自然にある植物を、そのまま標本化したものです。まず根っこを見ていただきますと、まず中心の大きな根っこがあります。そこから枝分かれています。

葉っぱがここに11枚ありますけれども、これ全部違う形をしているということが分かるでしょう。

つまり葉の領域、葉の部分だけを見ても、さまざまな形で無限の変容というものが起きているということが分かると思います。

この一番下の一番小さい部分のところですね、まだ生えてすぐのところの葉っぱを見ただけでは、一体この植物がどういうふうになっていくのかということとは分かりません。

葉っぱのところを見ていただくと、下のところがすぼんでいて、真ん中が広がり、そして上でもう一度すばまっていくという形が分かると思いますけれども、その広がった一番広がりのあるところにおいてその植物において、一番特徴的な葉っぱの形が出てくる、そしてそれを過ぎるとその花に近くなっていくと、また葉っぱが小さくなっていく、これはどの植物でもみんなそうです。

このバラを見ていただいても分かると思いますが、下のほうは 5 枚あります、で上に行く
と 3 枚、そしてさらに上に行くとも一枚だけの葉もありますし、一番最後の小さい葉っぱは
ちょうど炎のような、細い形をしています。

さらに上に行くとも、茎が伸びていて花があるわけですが、花というのはまったく葉の部分と
も、また根っこの部分ともまったく違った形態を取るというわけです。

これももう一度抽象化して描いた花の図ですけれども、根っこを見ていただくと主根がまっ
すぐ伸びていって、そこから脇に小さな根が生えていっていますけれども、これは実際に地
下に埋まった場合には、さまざまな形をしますけれども、理想的な形を描いた場合には、ま
ったく根がぐるぐる回ることもなく、まっすぐに横に広がった形を取るわけです。

その上にあるのが、先ほど申しました葉の部分の変容のプロセスです。そしてまたその上には
まったく形成の原理が違う花の部分がくるわけです。

左の方は根っこです。でこちらは先ほど申し上げましたけれども、左同じような形ですね、
それが無機質な物質の世界でも、結晶として同じようなものが見られるということ、形の上
では似ていますけれども、こちら右の方に見られるのは、トルマリンの結晶ですけれども、
これをよく見てみますと、その層がずっと重なっていって、真ん中に根っこのようなものが
通っているのがお分かりかと思います。ただしよく見ますと、常にこの層、同じものが繰り
返されている、決してここには変容というものがないわけです。それが無機の世界です。

この無機の世界とまったく違うのが、有機の世界、植物の世界です。こちらを見ていただい
ても分かるように葉っぱの変容の姿ですね、最初の丸っこい形から次第に展開をして、一番
最後は炎のような形になっていくわけですけれども、丸っこい形の一番最初のころの形を
見てみますと、渦巻状のものが左右にありますけれども、これはある意味では非常に水に近
いものというふうに考えることができます。すなわち左側の一番水に近い要素から、段々と
変容して一番最後の炎のような形になっていく、すなわち空気のなもので変容を終わると
いう、こうしたダイナミズムのある、リズムのあるそうしたプロセスを、変容という過程で
見ることができます。

まとめますと、根っこの部分はある意味では、非常に同じものの繰り返しという硬直化の傾
向があるのに対して、葉のほうは非常にダイナミズムに富んだ変容というものを観察する
ことができます。それで最後に花の部分についての説明ですが。

この花、日本にあるのは私も知っていますが、日本で見たことがあります。

この花、いくつの花弁があるでしょうか。

ケシの花、どなたもご覧になったことあると思うんですけども、けしの花、いくつ花弁があるでしょうか？

5枚という意見がありました。

ほかには？

どうぞ、怖がらないでおっしゃってください。何枚でも構いませんので。

6枚。

ほかには、どなたか。もうちょっとあると思う方？

8枚。

こういうふうな質問をしたのは、決してみなさんに教師として教え込もうとか、そういう気は全然ありませんで、そうではなくてわたしたちが花を見るときには、花を全体として見てしまう、花を決して一つ一つの部分で見ることがないということを、ちょっと自覚していたくためにこういう質問をただけです。

先ほど葉っぱのところでは、葉っぱが一つ一つ全部形が違うということをご覧いただいたと思います。これに対して花の場合には、花の花びらは一つ一つ形が同じものが集まって花を作っている、それをちょっと観察していただきたいと思います。

ケシの花というのは、植物学的に言うと花びら 4 枚です。4 枚が重なり合っておりますので、こういう形になります。

ここで決定的な重要なことは、私たち花を見るときには個別に、個々の花びらを見ているのではなくて、花全体を見るわけですけども、花の場合には花が一つ一つ、個性的な異なった形をするのではなくて、花が集まって全体として 1 つの花を作り出しているという、そうした形態を一つ一つの花びらがしている、そこに花の特徴があるわけです。

この花というこれが、まさにそのひとつの社会プロセスを表しているといってもいいと思います。これはもちろん人智学的な意味での社会的なプロセスなわけですけども、まさに花というのは、一つ一つの花びらそれは、個別的でありながら、それが集まってひとつの花全体というものを作りだしている、個が集まって全体を作る、また全体の中に個がある、というそういう社会プロセスを表しているわけです。

また花から、目を中心に向けますと、そこにはもういくつあるか分からないような花芯がたくさんあります。

話し長くなりますけれども、休憩ここで入れようかという計画が最初あったんですけども、話の続き、講演続けたいと思いますがよろしいでしょうか。

よろしいですか。

はい。

もしもここでどうしても休みたいという方がいらっしゃったら、ぜひぜひ手を上げてください。

大丈夫ですか。

針生：さっきスライドで、1972年のドクメンタでボイスは100日間の討論という形で参加した。それから77年は労働広場の蜂蜜ポンプ、私はどちらも見ているんですが、77年のドクメンタはちょっとかなり遅く会期の終わりごろに行ったんで、私が行った時には、その蜂蜜ポンプのオブジェというか、装置があるだけであった。さっきの説明だと77年の蜂蜜ポンプの時も100日間の討論をボイスはやったんだということなんだけれど、それははじめに聞いたんだ。ほんとにそうなのか？ 実際そうだったのか？

補足説明ですけども、すでに72年のドクメンタの時にも100日間の討論というのをやりました。101日目にこのアクションを終わって、デュッセルドルフの芸術アカデミーに戻ってきたときに、アカデミーとしては本来受け入れるべき学生を制限いたしまして、本来学生になりたいという人を締め出したわけです。これに対してボイスは大学の入学許可のハンコを持ちまして、勝手にハンコを押して、入学許可を出しました。これは本来一教授としてはやってはいけないことだったわけですけども、これが原因で後の大統領になる人物から、永遠にデュッセルドルフのアカデミーから排除されるという、こうした処分を受けることとなります。

72 年も 77 年も両方ともボイスは討論をやりました。でほんとに休みなしでやったわけですが、時々休憩はしまして、そのときには芝生の上にみんなで座って、そこで何か食べたり、またお話をしたりという、そうした休憩を挟んで朝から晩まで討論をしていたということです。

この 100 日討論の非常に特徴的なのは、そこに参加した誰もが同じ権利を持っていて、決して自分の意見だけを主張するため、相手を負かすための討論ではなくて、むしろ相手の意見を引き出すような形での、討論が、議論がなされたということです。まさにこの議論そのものがひとつの社会プロセスであるといえると思います。

このボイスが行った 100 日討論というものは非常に多くの実をもたらしました。で、実をもたらしたというのは、この花との連関でわざと私が使っている言葉ですけれども、花のこともちょっと考えてみてください。花はその花芯があって、ここの下のところでは、最後には実を結ぶわけですが、実を結んだときに、後から実がはじけてまたそこからさらに種が飛んでいく、というふうにならざるを得ない。100 日間の討論が実を結んだというのは、その花が花を終わらせて、最後に種を作り、そしてそれがはじけていくというプロセスにまさに、匹敵するわけです。

花のことももう一度目をやりますと、その花がいったいどういうふうにならざるを得ないかということですが、花粉が飛び散っていくわけですが、その花粉というのは、決して目に見えるようなものではありません。花粉というのは、ある意味では、結果をもたらすという意味では、1つのプロセスではありますが、まあ目に見えない、どこに飛んでいくか分からないという意味ではカオスでもあるわけです。この花粉というものを通じて、1つの花はほかの花に花粉を与える。でまたほかの花から花粉を得るという形を取りますが、このあり様、花というのは決して1つでは花粉を受けるわけにいかないで、1つの花はほかの花のためにある、という総合的な関係にあるわけですが、まさにボイスが考えていた社会プロセスというものも、このような花粉を受け、また与えるというギブアンドテイクの花同士の関係と同様に人間の関係もあるべきだというふうに考えていたわけです。

花というのは、今申し上げましたように、花粉をほかの花にあげることによって実を結んでいく。で、まさにそれは進化、エボリューションのプロセスであるといえると思います。これに比較して根っこはどうかと言いますと、冬には花がなくなってしまう、たとえば野生のバラのことを考えてみてもそうですけれども、冬には花がなくなってしまう、根っこは根っことしてまったく同じものとして、土の中にあるわけです。すなわち、ここには一切の変容もなければ、エボリューションもないというわけで、これと根っこを比べて、葉と

花というこの2つの部分、というのはまさに変化する、メタモルフォーゼ、変容するというそういう特徴を持っているわけで、これはまさに将来のために何らかの実を結ぶという動きを、もたらしているわけです。

ここで植物のことを考えてきましたけれども、花というものが先ほど申しましたように、社会プロセスである、すなわち1つの花がほかの花に花粉をあげることによって、またほかの花から花粉を受け取ることによって、実を結んでいくという、それは人間の世界に当てはめて言うならば、まさに連帯というものを表しているわけです。すなわち与えるとともに他から受け取るという、そうした人間の連帯関係の原像といってもいいと思います。

ちょっと植物学に話が及んでしまって申しわけないんですけども、まさにこの植物学のことを考えてみると、非常に社会プロセスということ、ボイスがどういうふう考えていたかということがよく分かってきます。

植物学という領域でのことを考えていくと、そのイデオロギーに硬直しない形で人間関係というものを考えていける可能性があるのではないかと思います。人間関係というものは自然界にあるさまざまな事象というものの、それに照らしていくことでよく見えてくるところがあります。この花を見ていただきたいんですけども、一つ一つのこの黄色い花、花弁ですね、それは1つでそれなりに完全な、それなりの花というふうなこともできます。しかしそれがまたたくさん集まってくると、また1つの花ができるわけですけども、その意味では、1つの花弁が集まった花というのは、1つのメタ組織と言ってもいいわけです。で、ちょうど人間に当てはめてみると、さまざまな人間が集まってできあがっている集団がこの花、組織としての人間集団ということになるわけです。

私はボッフムで教えておりますのは、特にモルフォロジーという領域なんですけれども、この研究で私がしようとしているのは、モルフォロジー、植物のさまざまな形態というものが、ある何らかの象徴的なイメージというものを媒介しているというそうしたことです。

こちらを見ていただきたいのですが、これはボイス自身が書いたものです。これは、植物の、先ほど説明したみたいに植物を描いているわけですが、下に根っこがありまして、そこは結晶と似たような性質を持っている、結晶性のものが図に出てきますが、そこから段々上がって行って、葉っぱの部分では広がりを持つ、それがまた上の方に行くとまたしゅうっとしぼんでいきまして、1つの線になって、その上に花が出てくるわけですけども、これすべてひとつの線で、一筆書きで描かれたものです。このボイスの絵ですね、これ先ほどの3つの部分からなった植物の話と重ねて考えてみてください。

芸術家というものはまさに自然界にあるというものを、1つの芸術という形にもたらしわけ

です。

これはもう 1 つの別のバージョンですけれども、先ほどの植物のを横にした形ですけれども、ダイアグラムの形で先ほどの植物のを表したものです。これをボイス自身は、彫刻理論のダイアグラムと呼んでいます。

この左の方がカオスで、右の方が形態の世界ですけれども、この間にさまざまな動きの段階が縦の線で示されておりまして、この真ん中のところにはちょうどさっきの蜂蜜ポンプですね、それを思わせるようなよじれた部分があります。

これ先ほどのとくっつけて実際にはこのような形になっているんですが、ヨハネス・シュトゥットゲンに見せたものですが、この 2 つがくっついてひとつになっていて、このダイアグラムから、さまざまな彼の彫刻の発想というものが出てきています。

このスケッチは、私のためにボイスが書いてくれたものなんですけれども、一番左側の部分、あれはカオスを表している部分ですが、これは錬金術の 3 つの要素で言うならば、これが硫黄の部分ですね、真ん中の部分、ここはダイナミズムを表していますが、これは水銀の部分、そして一番右側の部分は、塩、結晶性の塩を表しています。

この 3 つの要素という考え方は、もともとはアラビアの錬金術の考え方から出てきているものです。その後中世の錬金術、さらにはドイツロマン派が考えていた錬金術などに見られますけれども、ボイスが一番依拠しているのは、ルドルフ・シュタイナーの考えていた錬金術の考え方で、医者たちに植物について語ったときのものです。

この 3 つの要素ですけれども、硫黄の部分ですね、これは光を表します。一番右側の結晶化された部分、塩の部分ですけれども、これは塩でもあるし、塩のように結晶するものを示しています。真ん中の水銀の部分、メルクーアーと言いますが、メルクーアーというのはギリシャの神話でいわれる、メルクーアーという神でもあるんですが、このメルクーアーというのは、ギリシャ神話の中で天と地を行き来するもの、取り持つものといわれています。

ボイスは自然の中にさまざま存在しているものを抽象化して、そして自分の考え方、概念というものを展開しているわけですが、そのボイスが概念化したもの、それはまた逆に自然界を見てみると、さまざまなものにすでに存在している、当てはめることができるということが分かると思います。

この図なんですけれど、一番真ん中のところ、今示してらっしゃる真ん中の段の一番左側のところですね、その部分がまだ何も形が定まっていないカオス、不定形です。真ん中の部分が動きです。アクションと書いてありますが、それを通して右側にくると、そこは形が定まったもの、結晶化されたものという先ほど見てきた 3 つの要素がここに見られます。それに応じる形で一番上に、今度人間の身体との対応関係がありますけれども、一番左の部分が手と足ですね、それから真ん中の部分に心があって、人間の内面の感情の動きだったり、心の動きだったり、それで一番右側のところが思考、頭の形、頭蓋骨のような形がありますが、あそこが人間の思考の部分に相当するものです。で、これをさらに下に下ろしてきますと、ここの部分、思考に相当する部分に思考、考えるとあります、手と足に相当する部分、こちらは意志と書いてあります。でこれが、先ほどの植物の 3 つの部分について、作られたダイアグラムとこのダイアグラムでは人間のさまざまな身体とそれから、思考や心の動き、それを合わせて作られたダイアグラムです。

このダイアグラムはボイスの彫刻理論というものを示すものであると同時に、自然と芸術とそれから人間の社会というこれを作り出していく彫刻の原則、彫刻的なプロセスというものを表しているわけです。このダイアグラムを見てみますと、人間の 3 つの領域の中で、一体何が過剰であるか、何が足りないのか、どこに傾いているのかということが見えてきます。一番左側のその部分すなわち、手と足がある部分ですが、その傾いていってしまう場合には、人間は非常に暴力に訴える非常に凶暴な行為をする、真ん中の部分だけが勝ってしまいますと、感情にだけ溺れてしまうような行為に出る、一番右側の領域だけに偏ってしまいますと、そこでは抽象的な冷たい思考しかできなくなってしまうという、そうしたバランス、どこが欠けているのかという、ある意味では診断をする、そして治療をするということにもこのダイアグラムは使うことができるわけです。

先ほどの治療的な要素と申しましたけれども、もしも人間が頭の中で抽象的な思考をしていると、頭の中にああいう結晶ができてしまって、思考が硬直する。それに対して何をすればいいかと言うと、あの脂肪の塊です。あれを額の前にくっつける、あれが黒いのが脂肪の塊ですけど、あれをすることによって結晶化し過ぎた人間をもう一度直してやるという、そうした役割をします。

これはボイスが私のために書いてくれたものです。黒板に書いた図を紙に書いてくれないかというお願いをして書いてもらったものなんですけれども、こちらで先ほどから見えているさまざまなダイアグラムが組み合わされているのが分かると思います。一番下のところですが、ここの部分が先ほどの植物のダイアグラムです。それに対応するような形で、今度人間の身体と植物が描かれていますが、これが根っこの部分の結晶質の部分ですね。これが、人間の頭に相当して、葉っぱの部分が身体、それから花に当たるものが、生殖器ないし

は人間の代謝に対応すると、植物と人間の対応関係を描いています。それから、今度こちらの方には、ここが人間の精神生活で、こちらの方が法に関する領域ですね、一番上が経済に関する領域ですけれども、この精神生活、ここの部分がこの3つの部分が、それぞれまた植物の3つの領域に対応しています。精神生活に相応するのが根っこの部分、それから経済に対応するのが花の部分というふうに対応関係が見られると思いますが、ここが、先ほど経済的な領域に関しては、先ほど申しあげました花の受精、それと同時に連帯が起きる領域でもあるわけです。

先ほどの経済の領域においてそれは、花と同じように連帯がなされるべき世界と申しあげましたけれども、最近京都に旅行して街を見ましたときに、驚いたのは、街を見上げる丘のところにお墓がありましてそこに冷たい石が立っているんですが、そこから真下を見ると、お墓のすぐ真下のところに人間が生きている世界がある、まさにその風景を見たときにいかに人間の生活というものが硬直化して、そのお墓と同じように硬直化しているようになっていのかと、ちょっと驚きを感じたんですけれども、まさに私たちの現在の生活を考えますと、確かに精神生活、一人一人の精神生活に関しては、ある程度問題なく進んでいるんじゃないかと思えますし、また2番目の領域ですね、法の領域についても一応民主主義という制度があるという点では、まあある程度成功しているんじゃないかと、一番欠けているのが、一番上の経済の領域における連帯というだと思います。

でこちらの図でいきますと一番右側の下のところに太陽のような花のような形がありますが、これがボイスの考える未来の人間の社会のあり方です。これが太陽であると同時にまた花の形をしているということ、それは今までの話でお分かりいただけるかなと思えますけれども、ここのところにさまざまな暖かさを運んでいく渡し舟であるとか、その将来という世界を描いているところに、暖かさという言葉が入っているということ、そこからいかにボイスが将来、人間の将来の中で経済の領域における連帯、人間同士の暖かさ、やり取りというものが必要だと考えていたのかということが分かると思います。今のまさに私が考えますのは、人間の将来というのがまさに経済の領域におけるこの連帯性、友愛これが今私たちにとって一番重要ではないかなと考えております。以上を持ちまして私の講演を終わらせていただきます。

ボイスは芸術家であると同時にまた人間でもあり、また彼が試みたのは人間の生き方というものを芸術にしていくような芸術のあり方でありました。最も彼が重要だと考えていたのが、未来をもたらすような暖かさ、未来を暖かくすると同時に暖かい未来であるような暖かさ、それを表しているのがこの写真なんです。

ボイスが、フェルトの帽子を被っているのは頭を暖かく維持するためです。ここでボイスを正面から撮っているんですけれども、炎を正面から差し出しているところなんです。

が、この炎の意味なんですけれども、この写真を撮ったのがちょうど亡くなる 10 日ぐらい前で、偉大な彫刻家に捧げられる賞の受賞の時のものなんですけれども、このときにボイスが語った言葉があります。

炎を守りなさい。

さもないと風がこの炎を消してしまいます。

もしこの炎が消えてしまうならば、

私たちは痛みの前に声もなく

私たちの心を打ち砕いてしまうでしょう。

という言葉を残しています。以上を持ちまして、講演を終わりにしたいと思います。

ここの会場、9 時までいられるそうなんですけれども、まだディスカッションするエネルギーの残っていらっしゃる方、いらっしゃいましたら、ぜひ皆さんからの質問を受けてディスカッションをしたいと思いますが、いかがでしょうか。

守谷：質問があったら手を上げてください。マイクを持っていきますので。

大貫：一番前の方。

質問者：ボイスの作品は、すごく、あんまり私も詳しくないんですけども、とても抽象的な分、何か物の素材から感覚的に感じるところがすごく大きくて、たとえばボイスが作品を作るときに素材とか、質感とか何か考えていたこととかあるようであれば教えてほしいのと、あと、たとえば、何か作品化するときには素材をどのようなものを選んでいたのかとか、ちょっとしたエピソードがありましたら教えていただきければと思います。

ハルラン：ボイスがある特定の素材を使うということに関しては、あるエピソードがあるんですけども、皆さんすでに御存じだと思うんですけども、このエピソードはある意味では伝説でもあるんです。ボイスは第 2 次世界大戦のときに戦闘機乗りとして戦場に出るわけですけども、その飛行機が墜落しまして、そのおこった所がちょうどタタール人の住んでいる所で、タタール人に救われてフェルトのテントで、看病をされて、そこで脂、油脂を与えられた。それがあったがゆえに 5 日間でもう一度ドイツ軍のいるところへ移送されることができたんだ。そのおかげ、タタール人が与えてくれた物に対する感謝の気持ちというものが、彼が自分の生命を支えてくれた最も重要なものであるという意味と同時に、人間にとって非常に重要なものという意味で、彼がよく使う素材なんですけど、実はこれ伝説でして、彼が自分で作った作り話もありまして、5 日間もタタール人のテントにいたわけじゃあ

なくて、墜落したその日にドイツ軍の野戦病院ですか、そこに連れて行かれたそうなので、5日間もいたというのは彼が作った作り話だそうです。

確かにボイス自身がつくった作り話には違いないんですけども、ただ彼がこの経験から脂というものの、油脂が、脂肪の塊ですね、あれが形を持たないけれどもエネルギーを蓄えたもの、熱を蓄えたものとして、その後の彼の考え方の非常に重要な要素のなるということは確かです。

種と同じように、種も内側に脂分を含んでいるわけですけども、この脂、油脂というものが、タタール人のところ、非常に寒い極寒の地で命を救ってくれたという意味で、この脂というものの形を持っていないけれども、その中にエネルギーを秘めた物質として、彼にとっては非常にシンボリックな意味を持つわけです。この形を持っていないもの、それを実際の芸術作品の中では、空間の中に入れ込む、そしてそこで形を取らせる、というのが彼が行う芸術のアクションであるわけですが、そこで脂というものに、彼のこだわりはどこにあるのかというと、ここに由来があるということです。

大貫：よろしいでしょうか。

守谷：ほかにどなたか？

三上：ボイスがベストというんですか、チョッキというんですか、それをいつも着ていますよね、それはどういう、何か意味があるんでしょうか？　ということと、9.11の自爆テロを踏まえてですね、もしボイスだったならば、どのようなアクションを起こしているだろうかということを想像がつかますでしょうか？　そんなことです。

ハルラン：最初の質問ですけども、ジーンズと白シャツとベスト、これ3つというのはとっても実用的で、安上がりなわけです。でボイスという人間はとっても現実的にももの考える人で、結構ちゃんと節約をする人で、かといってケチかというところじゃなくて、非常に大様な人だったらしいです。いつもポケットの中に1000マルクぐらい入れといて、お金に困っている学生がいると、はいこれ、もってっていいよというようにくれて、でも僕の奥さんには黙っておいてねと言ったそうです。

もう1つは、このフェルトの帽子ですけども、フェルトの帽子とか、何らかの帽子ですね、短いつばの帽子を被っているのはなぜかということ、彼は戦闘機乗りとして3回墜落して、3回助かったということがあって、かなり頭の頭蓋骨を骨折しているということもあり、それを保護しなきゃいけないという実際的な理由もあったんですけども、ただシンボリックな理由としては、頭にある脂肪的なもの、それをフェルトで保護して、その暖かさを保存

するというそういうシンボリックな意味もあります。

大貫：9.11 というのを逆に読みますと 11 月 9 日になるんですね、で、それで 11 月 9 日というのは、ベルリンの壁が、壊れた日なんです、それで期せずして最初そちらの方でお答えいただいて、しかもそれが重要なので、面白いので、そこからいきますが。

ハルラン：ドイツ統一に対して、ボイスはどういうふうに反応したかということを経験されたとするならば、こう言うことができるんじゃないか。1949 年に制定された基本法、ドイツの憲法ですけれども、そこにはもしもドイツが再統一されたとするならば、必ず国民投票をして、新たに憲法起草委員会が制定した憲法を承認することを必要とするということがあるんですね、もしも再統一をする場合には必ず国民自身による合意がなければならないということがあるわけで、今回、この前のドイツの再統一には、その手続きがまったくなかったわけです。もしもボイスが生きていたとするならば、まさに国民投票という、その要素を非常に重要視したであろうし、また東ドイツの人々が自分たちの権利を認められることなしに、西側への編入となるような東西の合併には反対したであろうと思えます。

9.11 に関しては、すでにボイスは生前に、ここにボードに書いてあるような絵を描いたポストカードを作っています。この 2 つはツインタワーそれぞれの 2 つですけれども、そのツインタワーの上に脂の塊をくっつける、そういうふうな絵を作っています。これはいったい何を表しているかという、その経済というまったく冷たいシステムというものを、ボイスの考える脂の要素ですね、種の中に含まれている脂の要素というもので補ってやらないと、あるいは修復しないととんでもないことになる、彼は当時から警告していたわけです。この 2 つのツインタワーの乗った脂の塊の横に、それぞれコスモスとダミアンという名前を書いているんですが、コスモスというのは本来コスマスという名前なんですが、2 人ともキリスト教の聖人として奉られている人です。2 人とも医者でして、足のない白人の人に、黒人の足を切って、その白人の体に移植してあげる、というそういういわれのある聖人なんですね、この名前が由来するところを考えてみますと、この黒人の足を切ってという、黒人を使い捨てるようにして白人を生きさせるという、それをシンボライズしているといえると思うんですけれども、このことでボイスが言おうとしていたことは、現在の経済の制度、原理というものが、まさに白人以外の世界を搾取している制度に他ならない、でこのままいくとするならばいずれはテロのようなことが起きるだろうと彼は予測していたといえると思います。これでよろしいでしょうか。

先ほど脂の油脂をコーナーに塗ったアクションがありましたけれども、あれが 500 年の間にあそこの脂分がずっと壁全体に染みわたって家全体に行きわたるということをボイスが

言っていたということを思い出していただくと、このツインタワーの上に乗った脂というものが、おそらく 500 年の間には段々だんだん下に浸透して行って、あのツインタワーそのものが脂で浸透する日が来るのかもしれない、ただしそれは 500 年かかるとするなら、まだまだ現在はその段階には到達していないということを意味しているのかもしれない。